

親鸞における無戒の意義

一 楽 真

親鸞は『教行信証』化身土巻で、最澄の『末法灯明記』の文に依って、末法における仏道の質を無戒と決定している。ところが戒とは戒定慧の三学で語られるように、修道の第一番目に置かれているものである。それ故仏教と名告る限り戒が重視されるのは当然のことであり、受戒を以て仏弟子であるとされてきたのである。この立場からすれば無戒という主張は、仏教に非ずという排りを免れないものと言えよう。

それでは親鸞は、無戒を以て何を確かめようとしたのであろうか。結論から言えば、釈尊滅後の無仏の時に、どこで仏道が成り立つのか、何を以て仏弟子であると言えるのかを確かめようとしたと言える。それは仏道の基点とも言うべき戒の問題を取り上げることによって、聖道の諸教が自明としてきた、受戒に始まる修行から成仏へという発想を問い返すものである。しばらく「化身土巻」の文章に添って考えてみたい。

親鸞は末法・無戒ということ論ずるに先立って、そのことが持つ課題を明示している。

然^ニ扱^テ三^ニ正^ニ真^ニ教^ニ意^ニ披^テ三^ニ古^ニ徳^ニ伝^ニ説^テ頭^ニ開^テ聖^ニ道^ニ浄^ニ土^ニ真^ニ仮^ニ二^ニ教^ニ三^ニ誠^ニ邪^ニ偽^ニ異^ニ執^ニ外^ニ教^ニ二^ニ勸^ニ三^ニ法^ニ如^ニ来^ニ涅^ニ槃^ニ之^ニ時^ニ代^ニ開^ニ示^ニ正^ニ像^ニ末^ニ法^ニ旨^ニ際^ニ

この課題に対しては、まず『安樂集』の文に依って答えてくる。即ち、釈尊一代の経が悉く滅することを通して、釈尊が特留した

もう弥陀の本願を説く経に出遇わしめることに末法の意義を見定め、浄土の一門のみが末法における仏道たり得ることを言い切っている。末法の旨際と聖道浄土の真仮については、一応答えられていると言えよう。しかし「唯有浄土一門可通入路」が明らかに成った時、衆生の現実がいかにそのことに昏く、背いているかが見えてくる。それが「穢惡濁世の群生、末代の旨際を知らず、僧尼の威儀を毀る」と語られる衆生の問題である。

受戒に始まる修行から成仏とは仏道の大前提であらうが、それは同時に人間が仏道を求めようとする時に必ず持つ意識である。釈尊の入滅とは、そういう意識を問い返すでき事である。にもかかわらず、恒に何かを頼りとしようとする人間の自我意識は、釈尊の入滅を事実として受け止めることはできない。その立場でいくら教えに依っていると云っても、実際には自らの成仏の可能性を自らが弁証していくことにならざるを得ない。この在り方を親鸞は自力と押え、難行道と判するのである。難とは修行が厳しいということではなく、教えと自我関心が峻別し難く、修行が修行の意味を持つていることを証明し得ないことを意味している。ここに親鸞は「今の時の道俗、己れが分を思量せよ」と呼びかけ、威儀のみを仏教と執している立場からの訣別を求めている。

これに続く「案三時教」以下『灯明記』が結ばれるまでの文章は、涅槃したまい、正像末を説きたもうた釈尊の意図を確かめることによって、末代を生きているという分限を知らしめ、末代の仏道を明すものである。その中、末法の意義を經典に説かれてあることとして「戒定慧あることなし」と押えている点にまず注目したい。これが末法を言わない立場、また末法という言葉を使っても末法として問題にしない立場に簡んだ上での押えであること

を考えると、末法とは積尊の入滅を事実として受け止めるという課題を持つてゐることがわかる。その意味で「戒定慧なし」とは、釈迦衰退の事象を客観的に捉えたのでなく、仏弟子であると決定してきた根拠が無くなったことの確認である。積尊がましまさないにもかかわらず、ましますが如く夢を見ていたと知らされたことである。とすれば、持戒・破戒という意識自体が、自らの成仏の可能性を自明のこととしていっていると云わねばならない。故に親鸞は、持戒破戒を云々して仏弟子であることを決定し得る根拠が人間の中には全く無いことを、「仏涅槃の後、無戒洲に満たん」という仏言によって確かめるのである。

この確かめは必然的に、持戒・破戒という意識を根底から問い直すことになる。

問諸経律中広制三破戒不_レ日聽三入ニ衆一破戒尚爾何況無戒_ニ而今重_ニ論_ニ末法_ニ無_ニ戒_ニ豈_ニ無_ニ三_ニ瘡_ニ一自_ニ傷_ニ哉_一

この問いは、持戒であつてこそ仏弟子に加えられることを前提とした上で、無戒であるならば仏弟子でないのは言うまでもないが、戒が無いのならむしろ傷む必要が無いではないかと言つてくる。つまり、無戒ならば仏弟子ということは問題にならない筈だと言ふのである。しかしこの問い自体が無戒法を自明とする立場から起こされておき、積尊が入涅槃を以て示し、無戒と教えられた意図を無視しているのである。このことは、前の問いに對する答えにおいて明らかにになる。

答此理不_レ二然_レ正像末法所有行事広_ニ載_ニ諸經_ニ内外道俗誰不_レ披_レ諷_ニ豈_ニ貪_ニ求_ニ自身邪_ニ活_ニ一隱_ニ蔽_ニ持國之正法_ニ乎但今所_ニ論_ニ末法_一

唯有_ニ名字_ニ比丘_ニ此名字_ニ為_ニ三世真宝_ニ無_ニ福田_一

ここに述べられるように、無戒とは無仏法を意味するものでなく、ましてや自我の立場を弁明するために立てるものではないのである。自力心に立つ人間には、無戒と教えなければ法が明らかにならないことを見抜いた積尊の教えなのである。人間が予想するような戒定慧は無いと教えることによって、仏道への人間の自我關心の介在を断ち切るという課題が無戒にあると言える。

ここに、修道の全体は「たび仏の名を称し一たび信を生ぜん」という一点に凝集されてくる。これは修行を容易にしたのではなく、修道の課題を根源のところを押えたのである。つまり、仏在世の時に仏弟子の清浄性を決定するのが戒であつたが、仏涅槃によつて清浄・不清浄を決定する根拠ではなくなるのである。故に親鸞は、無仏時の衆生にとつての根本課題は清浄なる信心の獲得にあると見定めるのである。それは在世正法像末法滅を貫通する根源的課題が明確になったことである。

このように尋ねてくると、聖道の修行に耐え得ない無戒の者であつても救われるということをも、もしも弥陀の本願によつて弁証しようとするならば、全く親鸞が明そつとした無戒の意義に背くことになってしまう。それは無戒を破戒の延長線上に考えており、自らの救済を自我関心で肯定していくものでしかない。その意味で、衰退していかざるを得ない聖道の諸教と質を同じくするものである。

親鸞が明らかにした浄土真宗は、末法・無戒を教えとして領き、積尊の入滅を事実として受け止めたところにのみ始まる仏道なのである。